

言語獲得における機能範疇の分化

團迫, 雅彦
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/9193>

出版情報 : 九州大学言語学論集. 25/26, pp. 1-20, 2005-11-30. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室

バージョン :

権利関係 :

言語獲得における機能範疇の分化

團迫雅彦
(九州大学大学院)

キーワード：否定 WH 疑問文, SAI, WH-Criterion, FP

1. はじめに

Klima and Bellugi (1966)以来、英語を母語として獲得する幼児の発話において、WH 疑問文では必ずしも SAI (Subject-Auxiliary Inversion) が起こるわけではないことが観察されてきた。例えば、(1)のように WH 疑問文に否定が含まれると SAI が起こらない。

- (1) a. How they can't talk? (Adam 3;1)
- b. Why we can't find the right one? (Adam 3;3)
- c. Why he don't know how to pretend? (Adam 3;4)
- d. Why kitty can't stand up? (Adam 3;5)
- e. Why you won't let me fly? (Adam 3;6)

(Klima and Bellugi (1966:205), Bellugi (1971:99))

このような発話は、成人文法とは異なる特性を示すものであると考えられる。なぜなら、英語では(2)のように否定を含むかどうかに関係なく、WH 疑問文では SAI が起こらなければならないためである。

- (2) a. What has Mary said?
- b. *What Mary has said?
- c. What hasn't Mary said?
- d. *What Mary hasn't said?

そこで問題となるのは、英語の獲得段階においてなぜ否定 WH 疑問文では SAI が起こらないのか、ということである。本論文では、この問題に焦点を当て、その要因が獲得段階における機能範疇の特性によるものであると指摘する。

本論文の構成は以下の通りである。第二節では、本論文で扱う二つの問題を提示する。第三節では、先行研究である Guasti, Thornton, and Wexler (1995)と Radford (1996)を紹介し、その問題点を指摘する。第四節では、本論文の代案を提示し、問題が解決できることを示す。最後に第五節では、結語と今後の課題を述べる。

2. 本論文で扱う問題

本節では、先行研究が採用する Rizzi (1996)の成人文法における WH 疑問文の構造に関する枠組みを紹介する。その上で、幼児の否定 WH 疑問文がどのような問題を持つのかについて述べる。

Rizzi (1996)は WH 疑問文の構造に関する適格性条件である(3)の WH-Criterion を仮定している。

(3) *The WH-Criterion*

- a. A WH-operator¹ must be in a Spec-head configuration with X⁰ [+wh].
- b. An X⁰ [+wh] must be in a Spec-head configuration with a WH-operator.

(Rizzi (1996:64), (6))

この条件に基づくと、WH 疑問文は WH-Criterion が満たされているような構造になっていなければならないことになる。また、成人文法における WH 疑問文の構造を(4)のように考える。

- (4) a. [+wh]素性を持つ要素が主節 IP の主要部 I⁰ の位置に生起可能である。
- b. WH 疑問文は CP を投射する構造である。

このように仮定することによって、(2)の文法性の差を説明することができる。

¹ Rizzi (1996)は、WH-operator を以下のように定義している。

WH-operator = a WH-phrase in a scope position

(Rizzi (1996:73), (26))に基づく)

また、Rizzi (1996)は"scope position"について以下のように述べている。

[B]y scope position, we mean a left-peripheral A-bar-position (either a Spec or an adjoined position)

(Rizzi (1996:73))

(2a), (2b)の S 構造をそれぞれ(5a), (5b)に示す。

- (5) a. [_{CP} What_i [_C has [+wh]_j] [_{IP} Mary [_I t_j] [_{VP} said t_i]]] (=2a)
 b. * [_{CP} What_i [_C] [_{IP} Mary [_I has [+wh]] [_{VP} said t_i]]] (=2b)

(5a)ではCP 指定部に位置する *what* と C に位置する[+wh]素性を持つ *has* との間で指定部—主要部構造関係が成立している。この構造は WH-Criterion を満たしているので文法的であると説明できる。一方、(5b)では、CP 指定部に位置する *what* と I に位置する[+wh]素性を持つ *has* との間で指定部—主要部構造関係が成立していない。この構造は WH-Criterion に違反するので非文法的であると説明できる。このように考えると、WH 疑問文における SAI とは、文法の原理として WH-Criterion があり、それを満たさなければならないために、[+wh]素性を持つ要素が I-to-C に移動することであるということになる。

ところが、第一節で述べたように、英語を獲得する段階においては否定 WH 疑問文では SAI が起こらない。このことから、WH-Criterion が獲得段階では作用していないと考えられるかもしれない。もし、WH-Criterion が獲得段階で作用していないのであれば、助動詞を含む WH 疑問文では SAI が観察されないはずである。しかし、(6)の観察はこの予測とは異なる。

- (6) a. What are dat seal doing? (Adam 2;6)
 b. Where did it go? (Eve 1;8)
 c. Where are you? (Sarah 2;9)
- (Guasti and Rizzi (1996:287), (6))

また、(7)の観察結果は WH-Criterion が獲得段階から作用していることを裏付けるものである。つまり、獲得段階においても WH-Criterion を満たすために[+wh]素性を持つ助動詞は主語を越えて移動しなければならないということである。

(7) 助動詞を含む WH 疑問文の倒置 (+SAI) / 非倒置 (-SAI)

	+SAI	-SAI
Adam (2;3-3;7)	467 (91%)	46 (9%)
Eve (1;8-2;3)	58 (97%)	2 (3%)
Sarah (2;3-5;1)	250 (94%)	15 (6%)
Total	775 (92%)	63 (8%)

(Guasti and Rizzi (1996:287), Table 1 に基づく)

以上のように、WH-Criterion が獲得段階から作用していると考えた場合、(1)のような自然発話における否定 WH 疑問文において、(8)に示すような二点の問題があると考えられる。

- (8) a. 否定 WH 疑問文ではなぜ SAI が起こらないのか。
- b. SAI が起こらない否定 WH 疑問文において、どのように WH-Criterion が満たされるのか。

次節以降では、この問題に取り組んだ先行研究として Guasti, Thornton, and Wexler (1995)と Radford (1996)をそれぞれ概観し、その分析の問題点を指摘する。

3. 先行研究とその問題点

3.1. Guasti, Thornton, and Wexler (1995)

Guasti, Thornton, and Wexler (以下、GTW) (1995)は獲得段階でも成人と同様に CP を投射することは認めている。それに加えて、幼児文法には(9)のような成人とは異なる特性があると仮定する。否定 WH 疑問文で SAI が起こらないのは(9)の特性の相互作用であると主張する。

- (9) a. Dynamic Agreement という文法の操作が存在する。
- b. Neg-Criterion は IP 内で満たされなければならない。

(9a)における Dynamic Agreement を(10)に示す。

(10) *The Dynamic Agreement*

[A] WH-operator can endow a clausal head of the [wh] feature under agreement

(Rizzi (1996:76))

(9a)のように仮定することによって、SAI が起こるかどうかに関係なく WH 疑問文では WH-Criterion を満たすことが可能になる。つまり、成人文法とは異なり幼児文法では I^0 だけではなく、 C^0 も [+wh]素性が指定されるということである。従って、GTW (1995)の枠組みでは WH-Criterion の満たし方には I-to-C 移動と Dynamic Agreement の二種類があることになる。

次に、(9b)のように仮定することによって、否定 WH 疑問文では SAI が起こ

らないことが説明できる。(9b)における Neg-Criterion を(11)に示す。
Neg-Criterion とは、Neg-operator と[+neg]素性を持つ主要部との構造関係を規定したものである。

(11) *The Neg-Criterion*

- a. A Neg-operator must be in a spec-head relation with a [+neg] head.
- b. A [+neg] head must be in a spec-head relation with a neg-operator.

(Guasti, Thornton, and Wexler (1995:233), (16))

こうした仮定に基づくと、(12a)のような SAI が起こらない否定 WH 疑問文の構造は(12b)のようになる。

(12) a. What she doesn't want for her witch's brew? (Alice 3;8)

- b. [_{CP} What [_C [+wh]] [_{IP} she [_I doesn't_i [+neg]] [_{NegP} OP t_i] [_{VP} want for her witch's brew]]]]

(Guasti, Thornton, and Wexler (1995:235-236)に基づく)

(12b)では、chain ($n't_i, t_i$)と OP (neg-operator)との間で Neg-Criterion が IP において満たされる。このために、獲得段階の幼児発話には SAI が起こらない否定 WH 疑問文が観察されると GTW (1995)は主張している。

しかし、GTW (1995)の主張には以下のような問題点がある。Dynamic Agreement は WH-operator が直接[+wh]素性を主要部に位置する要素に付与するという条件であった。そうだとすると、定義上は否定 WH 疑問文と同様に、肯定 WH 疑問文にも Dynamic Agreement が適用されてもよいはずである。すなわち、SAI が起こらない否定 WH 疑問文が観察される段階において、(13a)のような SAI が起こらない肯定 WH 疑問文が観察されることが予測される。

(13) a. What you can do?

- b. [_{CP} What [_C [+wh]] [_{IP} you [_I can] [_{VP} do]]]

しかし、第二節で述べたように、この予測は正しくない。ここで例えば、Dynamic Agreement は否定 WH 疑問文にのみ適用されると仮定すれば説明できるかもしれない。しかし、そうだとすると、なぜある構文に限って Dynamic Agreement が適用されるのかが問題になる。文法の操作として Dynamic Agreement を仮定

する以上、そのような不自然な仮定をせざるをえなくなる²。

3.2. Radford (1996)

Radford (1996)は、Grimshaw (1993)が提案した UG の原理である(14)の Minimal Projection Principle (以下、MPP)を採用し、この原理が幼児にも作用していると主張した。MPP とは統語表示の経済性という観点から、統語構造が最小の投射から成り立たなければならないことを規定した原理である。

(14) *The Minimal Projection Principle*

Syntactic representations are the minimal projections of the lexical items they contain which are consistent with grammatical and lexical requirements

(Radford (1996:55), (21), cf. Grimshaw (1993))

(14)にあるように、統語構造はそれが含む語彙項目の最小の投射から成り立たなければならない。「最小の投射から成り立つ」とは、語彙的な要請と統語的な要請を満たす投射が最小でなければならないということである。語彙的な要請を満たすとは、主要部に音形のある要素があつてはじめてその主要部が投射するということを意味する。例えば、IP を投射する場合は I の位置に法助動詞など音形のある要素が生起しなければ、語彙的な要請を満たしているとはいえない。同様のことは幼児にもあてはまるとして、Radford (1996)は以下の例を挙げている。

- (15) a. want [baby talking] (Hayley 1;8)
b. want [mummy come] (Jem 1;9)
c. want [this go up] (Angharad 1;10)
d. want [lady open it] (Daniel 1;10)
(Radford (1996:46), (7))

(15)では、補文節において補文標識を欠いているので語彙的な要請を満たしていない。従って、この段階の幼児は CP を投射していないことになる。

また、統語的な要請を満たすとはある要素が移動により基底の位置とは異なる位置に生起することを意味する。例えば、CP を投射する場合は WH 疑問文

² Guasti (1996)でも、同様に Dynamic Agreement が仮定されている (Guasti (1996:261))。また、Guasti (2000)は C に [+wh] 素性が基底生成されると分析している (Guasti (2000:120-121))。

において助動詞がCの位置に移動しなければ、統語的な要請を満たしているとはいえない。この例として、Radford (1996)は(16)を挙げている。

- (16) a. Where the other Joe will drive?
b. Where I should put it when I make up?
c. What he can ride in?

(Radford (1996:69), (44)に基づく)

こうした発話が観察される段階では、語彙的な要請と統語的な要請を満たしていないためにCPが投射されないことになる。

また、MPPは統語構造はそれが含む語彙項目の最小の投射から成り立たなければならないという条件であった。「最小の投射」とあるように、MPPは表示の経済性の原理を含んでいる。このため幼児は複雑な構造よりも単純な構造を好むとしている (Radford (1996:55))。Radford (1996)は、Grimshaw (1993)に従い、節は動詞Vを投射したものであるという観点から、(17)を仮定している。

- (17) IP and CP are extended projections of V

(Radford (1996:46), cf. Grimshaw (1993))

IPとCPはVの拡大投射であるため、V以外にもIやCといった主要部を含んでいる。この点で、IPやCPは主要部にVのみを持つVPよりも複雑な構造である。MPPにより、拡大投射は最小限にしなければならない。当然のことながら、前述した語彙的要請・統語的要請も満たさなければならない。MPPを仮定することにより、獲得段階の発話は最小の拡大投射から成る構造になる。

では、問題の(18)のような否定WH疑問文はこれらの仮定に基づく、どのような構造になるだろうか。

- (18) a. How they can't talk?
b. Why kitty can't stand up?
c. Why he don't know how to pretend?

(Radford (1996:69), (44)に基づく)

MPPに従うと、例えば(18a)の構造は(19a)ではなく、(19b)になる。

- (19) a. [_{CP} How_i [_C] [_{IP} they [_I can't] [_{VP} talk t_i]]]

b. [IP How_i [IP they [I can't] [VP talk t_i]]]

拡大投射が最小なのは(19b)であり、MPPを満たすためにWH句がIPに付加すると説明される。こうした仮定から、幼児の否定WH疑問文の構造は(20)のようになることと導くことができる。

(20) [IP How_i [IP they [I can't [+wh]] [VP talk t_i]]]

(Radford (1996:69)に基づく)

この構造において、IPに付加したWH句と[+wh]素性を持つIの位置に生起する要素との間でWH-Criterionは満たされる^{3,4}。またCPが投射されないために、SAIが起こらないことも説明できる。さらに、Radford (1996)は機能投射に関する言語獲得過程を(21)のように仮定している。

(21) [A] three-stage VP > IP > CP model in which functional architecture is acquired in a bottom-up fashion, but is initially optionally projected (so that at Stage I clauses are VPs, at Stage II they are VPs or IPs, and at Stage III they are VPs, IPs or CPs).

(Radford (1996:76))

SAIが起こらない否定WH疑問文は、CPを投射せず、IPやVPを随意的に投射

³ Radford (1996)はWH-Criterionを以下のように述べている。

[W]H-Criterion, which (in the version assumed here) requires that interrogative WH-expressions move to a (specifier or adjunct) position in which they are contained within a projection of an interrogative head

(Radford (1996:58))

⁴ Radford (1996)はWH句が文頭に移動しなければならないのは、Scope Principleを満たすためであると仮定している。

(i) *The Scope Principle*

[I]nterrogative WH-expressions (by virtue of being wide-scope quantifiers) must have scope over (i.e., must c-command) all the other constituents of the clause containing them, at PF and/or at LF

(Radford (1996:57-58))

する(21)の Stage II に相当する (Radford (1996:69-70))。

しかし、MPP を仮定すると問題になる例がある。ここで注意したいのは、Radford (1996)が(20)は CP を投射せず、IP や VP を随意的に投射する(21)の Stage II において発話されたものであると述べている点である。この仮定が正しければ、この時期には SAI が起こる WH 疑問文は観察されないはずである。なぜなら、上述したように CP がなければ SAI は起こらないからである。しかし、この予測は事実と反する。(22)のようにこの段階ですでに SAI は起こっている。

- (22) a. How can it be? (Adam 3;0)
b. Mommy # what are those things ? (Adam 3;0)

従って、Radford (1996)の分析では否定 WH 疑問文で SAI が起こらないことは説明できたとしても、肯定 WH 疑問文で SAI が起こることを説明することはできない。

4. 代案 —機能範疇の分化—

4.1. 代案

GTW (1995)は機能投射が全て成人と同様に投射されており、特定の機能投射に言及した条件を仮定することで説明しようとした。しかし、特定の機能投射が獲得段階から投射されていると仮定したために、問題も残った。これに対して、Radford (1996)は特定の機能投射はある発達段階に至らなければ投射できないと考えた。それは MPP という原理が働いているためであり、(8)の問題もこの原理により説明できるとしたが、問題が残った。しかし、Radford (1996)のように、徐々に機能範疇を獲得するという考え方そのものは、獲得の事実を正しく記述できる可能性がある。この考え方に基づき、本論文では、獲得のある段階までは幼児の文法には特定の機能範疇は存在せず、未分化の機能範疇が存在すると主張する。本論文の主張の前に、Radford (1996)の MPP の内容を再検討したい。

Radford (1996)が提案した MPP は、統語構造は語彙的・統語的要請を満たす投射でなければならないことを規定した原理であった。しかし、MPP では特定の機能範疇の主要部が投射されることと語彙的要請・統語的要請との間の関係が明らかではない。例えば、Radford (1996)は以下の例を証拠としてこの発話が観察される段階では CP が獲得されていると主張している。(23),(24)がそれぞれ語彙的要請、統語的要請に相当する。

- (23) overt complementizer
- a. See if swimming water's there. (Jem 2;3)
 - b. You know that the flute is in there. (Hannah 2;7)
 - c. Leave a little space for them to get out. (Helen 2;7)
- (Radford (1996:70), (47))

- (24) SAI
- a. How did he get out? (Nina 2;9)
 - b. Why can't we open this piano? (Nina 2;9)
 - c. Can I have it? (Heather 2;2)
- (Radford (1996:71), (51)に基づく)

しかし、語彙的要請を満たせば必ず、その段階で CP が投射されるのだろうか。あるいは、統語的要請を満たせば必ず、その段階で CP が投射されるのだろうか。仮に、語彙的要請のみが満たされれば CP は投射されると考えてみよう。Diessel and Tomasello (1999)は(25)のように、補文標識 (*that*)が用いられる発話は4歳を過ぎてもほとんど観察されないと指摘した⁵。

(25) Number of complement clauses with *that* or with ZERO⁶

Age	1;2-2;11	3;0-3;11	4;0-5;1
<i>ZERO</i>	325 (100%)	338 (97.4%)	561 (99.1%)
<i>that</i>	0 (0%)	9 (2.6%)	5 (0.9%)
Total	325	347	566

(Diessel and Tomasello (1999:88), (6))

このことから明らかなように、補文標識 (*that*)の獲得は実際には非常に遅く、語彙的要請が満たされているとはいえない。従って、CP が投射されるのも非常に遅くなることになる。しかしそのように仮定すると、肯定 WH 疑問文で SAI が獲得の早い段階から観察されることが説明できない。なぜなら、Radford

⁵ *for, if, whether* については後述する。

⁶ (25)は CHILDES database より 6名の幼児 (Naomi 1;2-4;9, Eve 1;6-2;3, Peter 1;9-3;2, Nina 1;11-3;3, Sarah 2;3-5;1, Adam 2;3-4;10)の発話記録を基にしている (Diessel and Tomasello (1999:86))

(1996)は CP が投射されなければ SAI が起こらないと考えているためである。

また、統語的要請のみが満たされれば CP は投射されると考えてみよう。これまで論じてきたように、肯定 WH 疑問文では獲得段階から SAI が観察されるので、CP が投射されるのも非常に早くなることになる。しかしそのように仮定すると、否定 WH 疑問文で SAI が起こらないことが説明できない。

さらに、CP が投射されているにもかかわらず、なぜ補文標識のある発話が観察されないのかという問題が生じる。このように、語彙的要請・統語的要請はどちらか一方が満たされるだけでは不十分であると考えられる⁷。

そこで、本論文では獲得過程において特定の機能投射が成立するための条件を(26)のように仮定する。

- (26) ある発達段階において、機能投射 XP が投射されるのは以下の二つの条件を満たす場合に限られる。
- a. XP の主要部 X に基底生成される有形の（音形のある）要素を獲得している⁸。
 - b. XP の主要部 X に基底生成される有形の要素が主要部 Y ($X \neq Y$) の位置に移動するような要素である場合、Y に基底生成される有形の要素を獲得している。

言い換えれば、(26a)は、X に基底生成される有形の要素を獲得しない限りは、その機能投射 XP を投射することはできないことを規定した条件である。これにより、例えば、*that* や *for* といった補文標識を獲得してはじめて CP を投射できる。また、(26b)は X に基底生成される有形の要素が X とは異なる主要部 Y の位置に移動する場合、Y に基底生成される有形の要素が獲得されなければ、XP も YP も投射することはできないことを規定した条件である。例えば、I に

⁷ Radford (1996)は語彙的要請・統語的要請を同時に満たさなければならないとは明示的に述べてはいない。

⁸ (26a)と類似の議論は Ingham (1998)にもみられる。

[A] functional head is projected once its morpholexical reflexes have been acquired

(Ingham (1998:76))

Functional projections made available by UG do not become part of the grammar until there are clear reflexes of their presence

(Ingham (1998:79))

基底生成される助動詞を考えてみよう。助動詞は疑問文の場合 C の位置に移動しなければならない。この場合、(26a)を満たすだけでは IP を投射することはできない。(26b)により、IP を投射するためには助動詞の獲得だけでは不十分であり、*that* や *for* といった補文標識も獲得しなければならない。換言すると、CP と IP は同時に獲得されると考える。

さらに、(26)に関連して(27)を仮定する。

- (27) (26b)が満たされない場合に、XP/YP に分かれていない未分化の機能投射 FP (Underspecified Functional Projection)を投射しなければならない。

この条件を英語にあてはめると、IP と CP を投射しない段階では、FP を投射することになる。

(26), (27)を仮定すると、英語の獲得段階は(28)のように予測される。

- (28) a. Stage I [FP [F] [FP [F] [VP]]]
b. Stage II [CP [C] [IP [I] [VP]]]

前述のように、I の位置に基底生成される英語の助動詞は C の位置に移動する。しかし、C の位置に基底生成される補文標識の獲得は SAI が見られる段階よりも遅れる。従って、この段階では(26b)の条件により IP を投射することはできない。また、補文標識を獲得していないので(26a)の条件により、CP も投射することはできない。以上のことより、この段階では(27)の条件が適用され、IP/CP に分かれていない未分化の機能投射 FP を投射する。本論文では、この段階のことを Stage I と呼ぶことにする。言い換えれば、Stage I は I と C を区別できない段階であるということが出来る。

また、FP の主要部 F に生起可能な要素に関する制約を(29)のように仮定する。

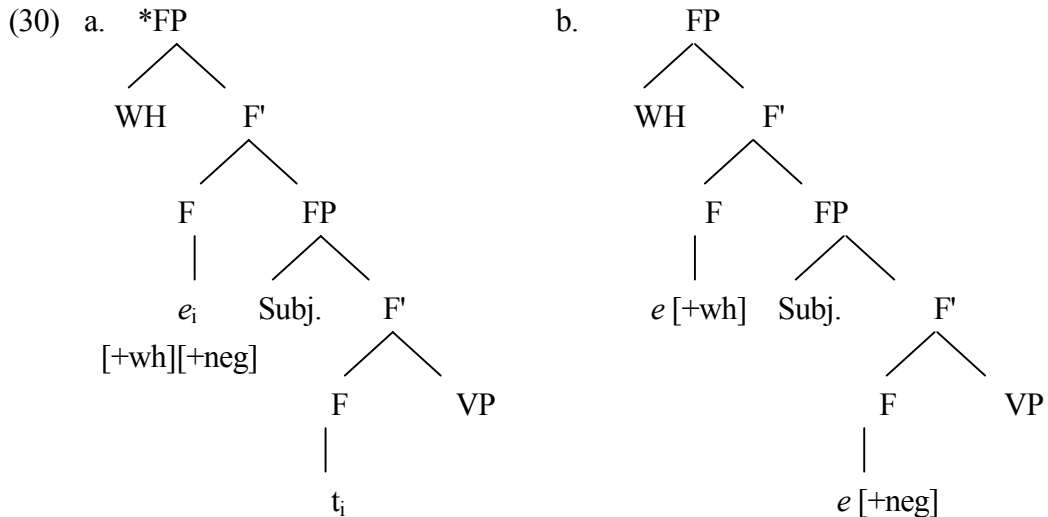
- (29) F には文タイプを決定する素性を一つだけ持つ要素が生起できる。

文タイプとは一般に平叙文、疑問文といった文のタイプを指す。否定文は平叙文に含まれるが、獲得過程においては独立の文タイプとして存在すると仮定する⁹。(29)の文タイプを決定する素性とは、WH 疑問文ならば[+wh]素性、否定文

⁹ 否定文が独立した文タイプであるという独立の証拠は、現段階では挙がっていないため、

ならば[+neg]素性にあたる。こうした素性を一つだけ持つ要素が生起できるのがFであると仮定する。

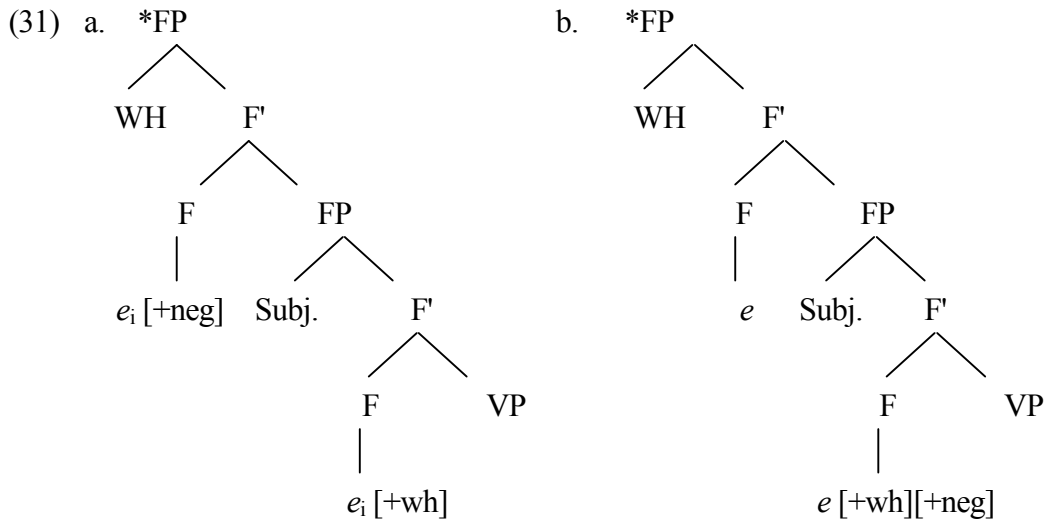
このように仮定すれば、FPを投射する段階では否定WH疑問文の構造は(30a)ではなく、(30b)のみが適格であることが導ける¹⁰。



(30a)はFP内でWH-Criterionは満たしているが、(29)の制約に違反している。なぜなら、文タイプを決定する二つの素性がFに生起しているためである。従って、(30a)の構造は派生されない。(30b)はWH-Criterionを満たし、かつ(29)の制約にも違反しないためこの構造は適格である。なお、(31)の構造はどちらも派生されない。

今後の研究の課題としたい。

¹⁰ 本論文では主語がFPの指定部に位置しているように表記しているが、VPの指定部にあったとしても、本論文の分析にとっては全く問題にならない。獲得過程における主語の詳細については、Pierce (1992), Ingham (1998), Ito (2001)等を参照のこと。



(31a)は WH-Criterion に違反している。(31b)は WH-Criterion にも(29)の制約にも違反している。以上より、FP を投射する段階における否定 WH 疑問文の適格な構造は(30b)のみであると結論づけることができる。

実際の発話も(32b)のような構造になり、WH-Criterion と(29)の制約を満たしている。それゆえに、否定 WH 疑問文では SAI が起こらないと説明することができる。

- (32) a. What she doesn't want for her witch's brew? (Alice 3;8)
 (Guasti, Thornton, and Wexler (1995:228), (4)に基づく)
- b. [_{FP} What_i [_F e [+wh]] [_{FP} she [_F doesn't [+neg]] [_{VP} want t_i for her witch's brew]]]

これまで問題にしてきた(8)は、(33)のように解決できる。

- (33) a. FP の指定部に位置する WH 句と主要部に位置する要素との間で WH-Criterion が満たされる。
 b. (29)の制約が作用しているために SAI が起こらない。

さて、これまで FP を投射する Stage I に重点を置いてきた。Stage I では補文標識を獲得していないために FP を投射すると述べた。また、FP を投射するために(29)の制約が働き、SAI が起こらない否定 WH 疑問文が派生されると主張してきた。もしこれまでの主張が正しければ、(34)が予測される。

- (34) 補文標識を獲得する時期は、否定 WH 疑問文において SAI が観察される時期より遅れることはないはずである。

もし、補文標識を獲得する時期が、否定 WH 疑問文において SAI が観察される時期よりも遅れるのであれば、本論文の仮定に従えば、CP ではなく FP を投射することになる。この段階で SAI が起これば(35)のような構造になり、(29)の制約に違反してしまう。

- (35) * $[_{FP} \text{What}_i [_F \text{doesn't } [+wh][+neg]_j] [_{FP} \text{he } t_j \text{ like } t_i]]$

また、もし補文標識を獲得する時期の方が早ければ、FP を投射するのではなく CP を投射できる。CP を獲得すればもはや(29)の制約が作用しないので、(36)のように縮約形助動詞が C の位置に移動した結果、WH-Criterion が満たされる。

- (36) $[_{CP} \text{What}_i [_C \text{doesn't } [+wh][+neg]_j] [_{IP} \text{he } t_j \text{ like } t_i]]$

さらに、FP を仮定することによって、肯定 WH 疑問文において SAI が起こることを説明できる。(37a)において下位の F に基底生成した助動詞が(37b)において WH-Criterion を満たすために上位の F に移動する。

- (37) a. $[_{FP} \text{What}_i [_F] [_{FP} \text{you } [_F \text{can } [+wh]]] [_{VP} \text{eat } t_i]]$
b. $[_{FP} \text{What}_i [_F \text{can } [+wh]_j] [_{FP} \text{you } [_F t_j]] [_{VP} \text{eat } t_i]]$

また、上位の F に助動詞が基底生成した場合が(38)である。この構造において WH-Criterion が満たされる。

- (38) $[_{FP} \text{What}_i [_F \text{can } [+wh]]] [_{FP} \text{you } [_{VP} \text{eat } t_i]]]$

FP は IP/CP に分かれていない未分化の機能投射であるので、上位・下位に関係なく、F に助動詞が基底生成できる。これにより、GTW (1995), Radford (1996) では捉えることができなかった問題を説明することができる。

(26), (27), (29)の仮定が正しいことを確かめるためには、(34)の予測を検証しなければならない。次節では、CHILDES database (MacWhinney (2000))を用い、この予測を検証することにする。

4.2. 検証

4.2.1. 調査方法

本節で調査した発話資料は、英語を母語として獲得する3名の幼児の筆記録に基づく¹¹。この筆記録は CHILDES database (MacWhinney (2000))に含まれており、それぞれが一人の幼児に関して縦断的にその発話を詳細に記録したものである。幼児の年齢、ファイル数を(39)にまとめてある。

(39) Data examined

<i>Child</i>	<i>Age</i>	<i>Files</i>
Adam (Brown (1973))	2;3-4;10	55
Abe (Kuczaj (1976))	2;4-5;0	210

上記2名の幼児を対象に、助動詞と主語を含む否定 WH 疑問文において SAI が観察される時期と、*for, if* といった補文標識が観察される時期を調査する¹²。

4.2.2. データとその分析

Adam, Abe の否定 WH 疑問文における SAI と補文標識 (*if, for*) の発話数とその発話時期をそれぞれ、(40), (41) に示した。

(40) Adam における SAI と補文標識

<i>Age</i>	+SAI	-SAI	<i>if</i>	<i>for</i>
3;0-3;8	0	27	3	2
3;9-4;5	16	9	14	11

¹¹ 他に、同じく縦断的に発話資料が記録された Sarah (Brown (1973)), Nina (Suppes (1974)), Nathaniel (MacWhinney (2000))についても調査を行った。しかし、否定 WH 疑問文の発話数が非常に少なかったため、ここでは扱わないこととする。

¹² *that* に関しては、すでに(25)に挙げてあるのでここでは扱わない。また、*whether* は3名とも観察されなかった。

(41) Abe における SAI と補文標識

Age	+SAI	-SAI	if	for
2;6-3;2	0	18	2	4
3;3-3;11	8	1	45	14

(40), (41)より、(42)のようにまとめられる。

(42) 否定 WH 疑問文で SAI が起こり始める時期は、補文標識が発話され始める時期より遅れている。

この事実は、予測(34)と合致する。

5. 結語と今後の課題

本論文では、英語を母語とする幼児の WH 疑問文に基づき、機能投射の条件を仮定し、機能範疇は言語獲得の過程において分化されると主張した。本論文では獲得段階における WH 疑問文のみを考察の対象としているため、上述の仮定の妥当性が十分に吟味されているとは言い難い。今後はより多くの獲得段階における観察事実から、本論文で提案された仮定の妥当性を検証したい。

* 本論文は筆者の修士論文「言語習得における機能範疇の分化」の一部を改訂したものである。本論文を執筆するにあたり、ご指導いただいた九州大学の稲田俊明先生、菅豊彦先生、坂本勉先生、久保智之先生、上山あゆみ先生にお礼を申し上げます。特に稲田先生には、長きに渡って丁寧なご指導をいただきました。心より感謝申し上げます。また、多くの九州大学の大学院生の方々にも日頃より貴重な助言をいただきました。さらに、二名の匿名査読者の方々には、多くの貴重な助言を頂いた。重ねて感謝の意を表します。もちろん、本論文の誤りは全て筆者の責任である。

参考文献

Bellugi, Ursula (1971) "Simplification in children's language," In *Language acquisition: Models and methods: Proceedings of a C.A.S.D.S. Study Group on "Mechanism of Language Development" held jointly with the Ciba Foundation, London, May 1968, being the third group in a C.A.S.D.S. programme on "The Origins of Human*

- Behaviour*". ed. Renira Huxley and Elisabeth Ingram, 95-119. NY: Academic Press.
- Brown, Roger (1973) *A first language: The early stages*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Diessel, Holger, and Michael Tomasello (1999) "Why complement clauses do not include a *that*-complementizer in early child language," In *The proceedings of the twenty-fifth annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 86-97.
- Grimshaw, Jane (1993) "Minimal projection, heads, and optimality," *Technical report #4, Rutgers University Center for Cognitive Science*. Rutgers University.
- Guasti, Maria Teresa (1996) "Acquisition of Italian interrogatives," In *Generative perspectives on language acquisition*, ed. Harald Clahsen, 241-269. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Guasti, Maria Teresa (2000) "An excursion into interrogatives in early English and Italian," In *The acquisition of syntax: Studies in comparative developmental linguistics*, ed. Marc-Ariel Friedemann and Luigi Rizzi, 105-128. London: Longman.
- Guasti, Maria Teresa, Rosalind Thornton, and Kenneth Wexler (1995) "Negations in children's questions: The case of English," In *Proceedings of the 19th annual Boston University Conference on Language Development*. 229-239.
- Guasti, Maria Teresa, and Luigi Rizzi (1996) "Null aux and the acquisition of residual V2," In *Proceedings of the 20th annual Boston University Conference on Language Development*. 284-295.
- Ingham, Richard (1998) "Tense without agreement in early clause structure," *Language Acquisition* 7. 51-81.
- Ito, Masuyo (2001) *Case marking and verb morphology in early syntactic development*, Fukuoka: Kyushu University Press.
- Klima, Edward S., and Ursula Bellugi (1966) "Syntactic regularities in the speech of children," In *Psycholinguistic papers: The proceedings of the 1966 Edinburgh Conference*, ed. Lyons. J. and R. J. Wales, 183-219. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Kuczaj, Stan (1976) *-ing, -s and -ed: A study of the acquisition of certain verb inflections*. Unpublished doctoral dissertation, University of Minnesota.
- MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES project*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Pierce, Amy E. (1992) *Language acquisition and syntactic theory*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

- Radford, Andrew (1996) "Towards a structure-building model of acquisition," In *Generative perspectives on language acquisition*, ed. Harald Clahsen, 43-89. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Rizzi, Luigi (1996) "Residual verb second and the wh-criterion," In *Parameters and functional heads*, ed. Adriana Belletti, and Luigi Rizzi, 63-90. Oxford: Oxford University Press.

Underspecified functional categories in language acquisition

Masahiko DANSAKO
(Kyushu University)

In this paper, I address the issue of the well-known developmental stage: Children who acquire English as a native language produce negative wh-questions without Subject-Auxiliary Inversion (SAI) (e.g., *Why we can't find the right one?*). Given the WH-Criterion is regarded as one of the principles in UG, two questions arise on children's utterances: why do children produce them and how can the structure satisfy the WH-Criterion? I propose that category labels of functional categories are underspecified at the stage of language development. Specifically, children project underspecified functional phrase (FP) which has the properties of both CP and IP. The two questions can be answered by assuming, (i) the element with the only one feature concerning the sentence type such as [+WH] can occur in the head of FP (F^0) and (ii) negative sentence is one of the sentence types at the stage of language development.